

食・農・村に関心のある人

かかわりを持ちたいと思っている人たちへ

2012年3月3日

特定非営利活動法人

NPO ひょうご農業クラブ

理事長 増田 大成

<農村、中山間地域、僻地の状況と問題の問題>

村は若者が町に出て行き、高齢化が進み人口が減少している。僻地の過疎地域では小集落は高齢化率が50%をこす限界集落化し、やがて消滅しているところが増えている。農業をする人が激減し、田畑が遊休地になり荒れてやがて山に還っている。この状態が雪ダルマ式に加速化し、再生をあきらめる声が大きくなりつつある。日本の農村は深刻な状況になっている。

だけどよく見てほしい。

そうであっても、限界集落だといっても、餓死者がでることはない。孤独死があるわけでもない。どっこい村は大丈夫なのだ。年老いた人びとを町から子どもたちが呼び寄せるが、出て行かないでそこに居る。村人たちは気丈で協同しながら生きている。

問題は、田畑がなくなると食べる人が困る。金さえだせば買える、外国から買えばよい、とみんな思っているが、それはお金があり余っている間と、売ってくれる国がある限りの話である。

買うことができなくなったとき、他国の人が日本の食べるものに最後まで責任をもってくれると信じられるか。問題の問題はそこにある。

<食・農・村の魅力

夢、ロマン、希望、ドラマ>

よく考えてみようではないか。

村の古老たちがいう。「村にはなんにもないから」「村の仕事はきついから」青年たちが村からいなくなるのだと。

それは本当なのか。

・なにもない ー その1 食は環境

よくあることだが、ものがありすぎるとそれがあたりまえだと思いうようになり、そのありがたみを忘れてしまう。私たちの活動舞台になっている宍粟市一宮町の北部は揖保川の源流地域である。水がきれいで豊富にありいたるところで湧き水がでる。名水の郷である。空気も土も汚れていない。自然豊かな土地柄である。その有難味を今年の3月11日以来気づかされ

痛感しつづけている。原発の放射能で汚染されたところでは、米や野菜を作りたくとも作れなくなった。

よくよく考えてみると、汚れの少ない中山間地域、僻地、過疎地と云われているところこそが、食べ物をつくる最適地だといえるのではないか。人々が農業を捨て荒廃していくところが、農業にとって宝の地ではないのか。この僻地の畑のなかで食や農のあり方を考える。

かつて、食品公害がひどかった頃、私たちは食の安全を追い求めた。今は食は環境次第だ。環境汚染の少ないところできれいな食べ物をつくる。きれいな食べ物こそが究極の安全を保障してくれる。私たちは農薬、化学肥料を使った事がない。

・ なにもない — その2 ドラマがある

白地のキャンパスには自分の好きな絵が思うようにかける。放棄田を耕し田畑に再生させる。ちょっとした開拓気分になる。何を蒔くか植えるか、自由に決める。田畑を舞台にしてどんなドラマを演じるかも自由。自然相手の仕事場は他人の顔をうかがったり、言動をあまり気にせず生きていける。まさに、過疎地は伸び伸びと自己実現できる場である。中山間地でたくましく自分の人生を切り開いている若者たちがいる。

・ 村の仕事はきつい — その何倍もの悦びがある

ひと昔も前、農業は3K業（きつい、汚い、かっこう悪い）といわれた時代がある。今は様変わりしている。衣、食、住、空間、自然環境などいろいろな面で都市生活者より豊かになっている。都市生活者が知らないだけだ。

たしかに、仕事の内容と環境を比較すれば違いはある。冷暖房のきいたオフィスでの事務仕事とは比べようがない。

農業者が実感している仕事の喜びをあげればたくさんある。

① 四季おりおりの変り目を全身で感じる。

四季折々の変り目を感じとるにはずっと自然のなかにいなければ受け止められない。変化する様を実感する。畑のなかで仕事をしながら、人間も自然の一部なのだと自覚できる至福の時である。

② 種を蒔いたら芽をだす — 野菜は自ら育つ

人間にできることは何なのか。

肥料をまき、田畑を耕し、種を蒔く。水をやり雑草（といたくない

が)をとる。種は芽をだし大きく育て収穫される。芽をだすのも、水分や養分を吸収して大きくなるのも野菜がもっている生命力である。人間はただ、ほんの少しだけ手伝いをしているにすぎない。

野菜をつくる、育てる、とのいい方は人間の傲慢な意思の表れである。化学肥料や農薬を使う人が、それを承知のうえで使うのとあまり考えずに使うのでは大違いである。前者は有機農業者、後者は無機農業者の傾向がある。

③ 落胆 ー 腹固め、覚悟する。

栽培したものが思うように収穫できないことがある。途中で駄目になって挫折をかみしめることになる。病気、虫、雑草、天候（雨、風、日照り、寒気）、それに害獣、小鳥、ねずみ・・・などなど。

病気、虫、雑草は農薬を使えばなんとか防げる。農薬を使わない私たちはあきらめるしかない。他の対策に知恵をしぼることになる。自然相手の農業は人間の意思や努力ではなんともしがたいものがある。機械相手の工業生産とは基本的に異なる。予測しがたく、被害の原因は分かっているにもかかわらず結果にだれも責任がもてない。“そういうものだ”と腹固めをし、おりこみずみの覚悟がある。これが農業者の本質である。

④ 収穫の感謝

自分が栽培してきたものを収穫することほどうれしいことはない、思わずにっこりする。みごとに収穫物を目の前にすると自分をほめてやりたいもなるが、幸運の重なりによることの方が多いのだから、そこは神々に感謝、感謝。秋祭は感謝祭なのだが、感謝は二の次で、人間様の楽しみの方にだんだんウエイトが重くなってきている。

⑤ 医者より尊い？

お医者様は病人の苦しみや生命をすくってくれるから感謝され尊ばれる。農業者は病人はもちろん、老若男女すべての人々の健康と生命を守っているのだからお医者様以上に尊ばれても不思議でないはずだけど、どうも最近は消費者から不信感すらもたれているのではないか。農業者も自信がないのか、自分のつくったものを他人（機関）の権威に頼って認証してもらったりしている。農業者が本来の自信と誇りと責任を持つようになれば TPP などちっとも恐くなんかないのと思う。

＜農の未来は大きい＞

これから日本の農業はどうなっていくのだろうか。農業関係者だけでなく国民の多くが心配している。それを決定づけるのが、TPP（環太平洋貿易パートナーシップ協定）への参加いかんということになるだろう。政府は参加を前提にして日本の農業の将来ビジョンを打ちだしている。

要は国際競争力に負けない農業をつくろうということである。そのために一農家あたりの農業規模を拡大し経営の合理化をすすめることだという。

平地のところは30ヘクタールぐらいの稲作規模をめざしている。中山間地は20ヘクタールにする。平地はともかく、中山間地の20ヘクタールの集約は僻地へいくほど困難で集約ができないところが残され、放棄田化する。

結論的にいえば、中山間地の農業と地域をどうするのかということである。過疎地の農業とむらをどうするか。その構築が今後の日本の農業と農村のあり方を左右する。私たち一人一人が一步踏み出すしかない。そこに私たちは大きな夢とロマンをかけている。

提案 中山間地の農業のあり方を創造していく 農業の社会的産業化をめざす

(1) 理念、コンセプトの明確化

① 中山間地、過疎化地域の特徴、強みの明確化

この地域の環境は、食の生産にとって最適地である。
その優位性を明確にする。

② 農業の社会的産業化をめざす

農業を競争と経済的合理性で存立を問うと中山間地の小規模農業に勝ち目はない。

農業は、人間の生命を育み、継承していく本来の使命を自給自足できない消費者から委ねられている。

中山間地の農業は、その使命を担っている。

その農業の存立の可能性は社会的な幅広い参加以外にありえない。

(2) 社会的参加、サポートシステムの構築

- ① 都市生活者の参加システムづくり
 - 1 農業生産現場へのボランティア参加
 - 2 生産品の購入
 - 3 イベント等の活動への参加
- ② 自治体、行政とのコラボレーション

<農業を仕事にするとどうなるか>

農業を仕事にする場合3つの選択肢がある

- | | | |
|--------|----------------|----------------------|
| 第1の選択肢 | ① 大規模農業を目指す | ・・・企業化の方向 |
| | ② 中小規模の農業を目指す | ・・・生業的農業の方向 |
| 第2の選択 | ③ 専門的農業を目指す | ・・・米、トマト、イチゴの
ように |
| | ④ 複合的農業を目指す | ・・・米と野菜、野菜と養鶏 |
| 第3の選択 | ⑤ 有機無農薬農業 | ・・・全て有機 |
| | ⑥ 無機農業もしくは併用農業 | ・・・一部有機、一部無機 |

これら①～⑥の組み合わせをどうするかで農業のあり方が決まってくる。

家が農業で田畑、農業機械、倉庫などがある場合と新規参入とでは、スタートラインに立つ時から大きな差がついている。

さらに大事なことは、どのタイプを選ぶかは農業に対する自分の考え方や生き方を決めていく。

最後にもう一つの選択がある。それは農業を企業化した法人に勤務する道である。NPO ひょうご農業クラブもそのひとつである。

NPO ひょうご農業クラブでどんなことができるか、ご紹介しよう。

- (1) これまでやってきたこと、今やっていること、これからやろうとしていること。

1999年	野菜栽培開始	有機無農薬	相生市、赤穂市	生産
2000年	レストラン、食堂開店、幼稚園・学校給食		神戸市 (六甲アイランド)	加工
2001年	法人設立	野菜販売、朝市、宅配、店舗	相生市、神戸市 (六甲アイランド)	販売
2003年	食堂開店、高齢者弁当宅配		相生市	福祉
2010年	あこがれ千町の会	中山間地小集落の活性化	宍粟市一宮町	村づくり
2012年	青年の村、過疎地再生大学 設立準備	過疎地再生事業に挑戦		過疎地再生

- (2) 職員としての仕事

- ① 野菜づくり 畑の作業
- ② 仕入れ 米、野菜、農産物の仕入れ 農家、生産者
販売所などから
- ③ 販売 神戸市（2店）、相生市（1店）の直営店舗で販売
- ④ 一般事務
- ⑤ 地域再生活動 地域住民や都市住民ボランティアの人たちとの活動のサポート。事務局。

- (3) 勤務条件

- ① 給与 22才 180,000円 年齢加算
- ② 勤務 週休標準2日
- ③ 社会保険 加入

- (4) 採用人数 1～3人（18～25才）

- (5) 希望 普通自動車免許

農業ボランティア、農業体験、青年の村サポーター、過疎再生大学
入学などについてお気軽に、お問い合わせご相談ください。

(Tel 090 5155 7121 増田)